

問題と目的

近年、子どものうつ病がこれまで考えられていたよりもずっと多く存在することが明らかになってきた。傳田(2008)によると小学生で7.8%の子どもたちがうつ病のリスクを持っており、うつ病の有病率は小学生で約1%であるという。2学級から3学級に一人はうつ病の子どもが存在することとなる。古荘(2010)は、学童期は精神疾患の発症、もしくは最初の症状が見られる時期であると述べ、この時期の学校関係者の子どもへの対応の重要性を指摘している。これらのことから、小学生の精神的な健康が脅かされつつあることが予測され、小学生の精神的な健康の問題は、見過ごすことのできない課題であると言えよう。

一般に児童期は発達上の問題が比較的少ない時期と見られているが、学校現場で一人一人の児童の話を聞いていると、友人や教師などとの対人関係、自分の能力、家庭環境や家族との関係など、様々な悩みを抱えながら生活している児童は少なくない。中には両親の離婚や死別など、非常に辛い出来事に遭遇する児童もいる。そのような状況にありながらもほとんどの児童が適応的に毎日の生活を送っている。一時的には精神的なダメージを受けたとしても、いずれ普通の生活に戻り友人たちと変わりなく生活できる回復力を持つ者も多い。

ストレスなどによる精神的なダメージから立ち直ることのできる個人の特性および能力、スキル、プロセスについて、レジリエンス(resilience)という語を用いて研究が進められている。レジリエンスとはもともと物理学の概念であり、物体の弾力性や柔軟性という意味であり、さらに船が傾いた時に元に戻る復元力という意味でも使われる(仁平 2009)。加藤(2009)は、1970年ごろから英米圏でレジリエンスの概念に関心が集まり出し、環境に恵まれない、トラウマを持った子どもたちをいかに逆境を乗り越えられるように導けるのかということに関心が寄せられるようになったと述べている。近年では児童精神医学、発達心理学、発達精神病理学の分野で活発に研究が行われているが、わが国でも関心が高まり、ようやく教育現場にもレジリエンスの概念が紹介されるようになってきた。小原・武藤(2005)によると、「レジリエンス」の概念を最初に示したのは Rutter(1990)で、危機的状況への人々とりわけ子どもの対処の仕方に着目して、「レジリエンス」を「深刻な危険性にもかかわらず、適応的な機能を維持しようとする現象」とし、深刻な逆境に対する抵抗力の個人差であると考えた。「危機的状況」、「深刻な危険性」、「深刻な逆境」などの言葉の通り、災害や深刻な親の健康状態など日常生活の範囲を超えた状況における、個人内の能力としての概念が研究の出発点である。

レジリエンス研究は、当初は虐待、貧困、親の精神障害などの強い持続的なストレスを受ける子どもや青少年の研究が中心だった。仁平(2009)は、レジリエンス研究の2つの方向への展開について述べている。一つは当初の研究の方向性を引き継いだ、特有の状況で発揮されるレジリエンスに関する研究である。最近の研究例でいえば高齢者、がん患者とその家族、緩和医療スタッフなどのレジリエンスといったものが挙げられる。そしてもう一つは一般的な子どもの健康な発達の条件の研究である。その上で前者を特殊レジリエンシーの研究、後者を一般レジリエンシーの研究と呼び分け、レジリエンス研究ではどちらを意識した研究であるのか明確にする必要があると述べている。教育の場でのレジリエンス研究を考えると、仁平(2009)が述べた一般レジリエンシーの研究の方向性がより適していると考えられる。(仁平は、うまくいった適応の状態、またはそこに至る過程をレジリエンスという語を用い、そのような回復をもたらす人的特性や能力を意味するときにはレジリエンシーという語を用いている。)

レジリエンス研究は発達結果の違いを導く個人及び要因についての記述を試みる研究から始まった。その後レジリエンスの変化に寄与する要因としての個人要因や環境要因・社会要因を明らかにする研究を経て、さらに環境要因や社会要因を利用したりコーピングなどを用いたりしてストレスをコントロールするスキル、そしてこれらをすべて含むプロセスを明らかにしレジリエンスの育成を試みる研究というように、研究は今も発展を続けている。

レジリエンスと類似する概念としてハーディネス (hardiness) やコーピングがある。仁平(2009)はハーディネスとレジリエンスを比較して次のように述べている。レジリエンスは、いったんはストレスからの影響を受けてもとに戻る柔軟性という意味合いであるが、ハーディネスは、強いストレスの影響を最初からはねつけるという「頑健さ」を強調している概念である。このように考えるとレジリエンスとハーディネスはストレスを認知していても、ストレスから影響を受けるかどうかといった点で異なる。さらにハーディネスは元来「高ストレス下で健康を保つ人が持っている性格特性」である (Kobasa,1979)。そのため、育成の可能性という点で考えても両者は異なると考えられる。教育への適用を考えた際、性格特性としての一面が強いハーディネスと比べて、育成の可能性がより高いと考えられるレジリエンスの方が、意義があると言えよう。もう一つのコーピングはストレス反応を低減することを目的とした、絶えず変化していく認知的または行動的努力のプロセスを指す (岡安 1999)。小塩・中谷・金子・長峰(2002)は、コーピングは困難な状況における心理的過程を扱っているものの、個人の認知的側面を重視した概念であると述べ、さらにコーピングはレジリエンスを有する者の認知的な傾向や特徴と考えるのが適切であろうと述べている。よってコーピングは、適応に向かうプロセス全体を含む概念であるレジリエンスに包含される概念としてとらえることができよう。

国内におけるこれまでのレジリエンス研究としては、小塩ら(2002)が大学生を対象に

レジリエンスの状態にある者の心理的特性を反映する精神的回復力尺度を作成し、ネガティブライフイベントの経験の有無およびつらさの程度、自尊心との関連を検討している。そして、精神的回復力尺度は「新奇性追求」「感情調整」「肯定的な未来志向」の3因子で構成されること、苦痛に満ちたライフイベントを経験したにもかかわらず自尊心が高いものは、そのような経験をして自尊心が低いものよりも精神的回復力が高いことを報告している。高辻(2002)は幼児を対象として保育者評定用のレジリエンス尺度を作成してその信頼性・妥当性について検討している。対象となる幼児本人に面接を行い、社会的適応測度としてのソシオメトリックテストの結果と仮想の社会的課題場面に対するストレスの認識度と対処の仕方について、レジリエンスの観点から保育者が評定した結果との関連を見ることにより尺度の妥当性を明らかにした。これらは日本のレジリエンス研究としては早い時期のもので、レジリエンスを正確に測定するための尺度の開発を研究の目的の一つに据えて取り組んだ例である。

石毛・無藤(2005)は、中学生を対象として受験期の学業場面における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャルサポートとの関連について検討している。そして、レジリエンス尺度は「自己志向性」「楽観性」「関係志向性」の3因子構造であること、そしてストレス反応と成長感を精神的健康の指標とした上でストレス反応の抑制には「自己志向性」と「楽観性」、成長感の促進には「自己志向性」が寄与していることを明らかにして、レジリエンスが精神的健康を維持する役割を果たしていることを報告している。さらに石毛らはレジリエンスとソーシャルサポートとの相関関係を明らかにしている。石毛・無藤(2006)は、中学生を対象として Cloninger の7次元モデルを用いてレジリエンスとパーソナリティとの関連を検討している。そしてレジリエンス尺度は「意欲的活動性」「内面共有性」「楽観性」の3因子からなり、男子の場合では「意欲的活動性」と「自己志向」および「協調」、内面的共有性と「協調」が有意な正の関連を示し、女子の場合は「意欲的活動性」と「自己志向」、内面共有性と「報酬依存」が有意な正の関連、そして「楽観性」と「損害回避」が有意な負の関連を示したと報告している。レジリエンスとパーソナリティとの関連にかかわる研究としては他に中谷・小塩・金子・長峰(2002)のビッグファイブと精神的回復力の関連の検討があげられる。中谷らは、精神的回復力は神経症的傾向とは負の、開放性および誠実性とは中程度の正の相関があることを報告している。このように国内の研究でもレジリエンスの変化に寄与する個人要因や環境要因が明らかになりつつある。

小学校に通う時期はエリクソンの言う学齢期に当たり、その発達課題は生産性を手に入れることである (E.H.エリクソン 1959 小此木啓吾訳 1973)。人々との関係の中で、失敗しながら無数の学校的課題に対する自分なりの対処・達成を承認されることを通して生産性の感覚を確かにしていくことが児童期においては大切であるとされている。失敗を恐れずに挑戦し続けていくために必要なものは、一つは他者からの承認であるが、根本にあるものは個人の内にある折れない心のしなやかさであると

えよう。冒頭に述べたように、精神的な健康に問題を抱えていると言われている小学生においてレジリエンス研究に期待するものは非常に大きいと思われるが、国内の小中学生を対象としたレジリエンス研究はまだ始まったばかりといえる段階である。中谷・小塩・金子・中山(2007)が学校教育におけるレジリエンスという観点から、1学期から3学期に渡る学級適応の過程において、子どものもつ精神的回復力が後の精神的健康にどのような影響を及ぼしているかについて検討している。そして精神的回復力は学年初めの精神的健康に対して積極的な効果をもつことと学年末における精神的健康の程度には関連が見られないことを報告している。また、下川・室田(2007)は小学生を対象として精神的回復力と家族コミュニケーション及びソーシャルサポートとの関連を検討している。そして、特に家族コミュニケーションと精神的回復力の関連が示唆されたと報告している。

これらの研究では、レジリエンスの測定尺度は小塩ら(2002)の大学生を対象とした尺度に表現の改変を加えて使用している。発達段階や年齢に応じた生活経験の違いを考慮すると、大学生のレジリエンス尺度を表現の改変のみで小学生に適用して良いものか疑問が残る。さらに児童期にある者のレジリエンスの構造や機能はまだ明らかにされていないのが現状である。そこで小学生の独自性が反映された尺度の開発が求められ、そして作成された尺度の信頼性・妥当性の検討と共に、「小学生のレジリエンス」が青年期や思春期のものと構造的・機能的にどのように異なるものであるかが明らかにされる必要があると思われる。

レジリエンスとは困難で脅威的な逆境にさらされ心が折れそうな状態になっても、何とかしてその逆境を乗り越えて、精神的な健康を維持しながら環境に適応していく個人の能力やその適応の過程を指す。したがってレジリエンスの力が高い者は、ストレスフルなライフイベントが多くなっても精神的な健康の状態を維持してことができるが、レジリエンスの力が低いものは、ストレスフルなライフイベントが増えるにつれて精神的な健康が損なわれていくものと考えることができる。本来ならば個人内におけるストレスフルライフイベント体験の変動をベースにした上で、個人内の精神的な健康を示す指標の変動についてデータ収集できればよいのだが、倫理面の配慮からライフイベントの操作は不可能であると判断し、本研究では個人間のデータを分析対象として検討を進めることとする。

小塩ら(2002)はレジリエンス得点を従属変数とした2(自尊感情の上位・下位)×2(ライフイベント経験数上位・下位)の分散分析を行っている。そして苦痛に満ちたライフイベントを経験したにもかかわらず自尊感情が高いものは、そのような経験をして自尊感情が低いものよりも精神的回復力(レジリエンス)が高いことを報告し、レジリエンスの機能の一側面を明らかにしている。しかし小塩ら(2002)は大学生を研究対象にしているため、児童期に関しては本研究において確認する必要があるだろう。さらに中谷ら(2007)は児童の精神的回復力は学年初めにおいては精神的健康の「無気力」や「抑うつ」

に対して積極的な効果をもつと報告している。このことから、児童期のレジリエンスは自尊心以外の精神的な健康を示す指標に対しても効果を持つことが予想される。本研究は長期的にはレジリエンスの概念に基づく健康教育プログラムの開発と学校現場での予防的介入による効果の検討を視野に進められている。そこで小塩らによる先行研究の結果が小学生にも適用されるか確認する意味で、精神的な健康を示す指標として自尊心を採用する。またレジリエンスの概念を学校現場での教育に生かすことを考慮した上で、もう一つの精神的な指標として学校生活適応感を採用することとした。

本研究では小学生用のレジリエンス尺度の開発およびその信頼性・妥当性の検証を目的とする。妥当性の検討に当たっては、レジリエンスの概念に則り、レジリエンス得点の高い者はストレスフルなライフイベントが増えても精神的な健康を示す指標の値を高く保つことができるか、分散分析を用いて検討するものとする。

予備調査 1

1 目的

レジリエンス尺度の項目候補の収集

2 方法

- (1) 調査時期：2010年9月
- (2) 調査対象：青森県内の公立小学校6年生24名（男子11名，女子13名）
- (3) 手続き：小学校の教室で半構造化面接を実施。所要時間は1人15分程度。
- (4) 面接内容：「6年生になって半分が過ぎようとしていますね。あと6か月で中学生になります。今まで楽しいこともそうでなかったこともいろいろあったと思います。これからいくつか質問しますので、今までの生活を思い出して答えてください。」と教示して次のように尋ねた。「今までの小学校の生活の中で1番楽しかったことは何ですか。」「反対に辛いことや悲しいこともあったと思いますが、落ちこんだ気持ちになった時、こうすれば元気が出るとかこう考えれば元気が出るとかそういったことを何か教えてください。」についてである。

3 結果

面接調査から以下のような回答が得られた。

- ・授業を楽しんで参加してテンションを上げて、いやなことを忘れる。
- ・信頼できる友達に相談する。
- ・帰宅してからまくらにむかってさけぶと元気が出る。
- ・失敗した事を自ら認めて、相手に謝ればすっきりして元気が出てくる。
- ・買い物をしたりゲームをしたりしていればわくわくしてきて元気になる。
- ・特に何もしないで自然と忘れる。
- ・好きなことや楽しいことを考えるようにする。

- ・問題に対してポジティブに考えるようにする。
- ・親に相談する。
- ・相談してアドバイスしてもらったことを実行してみる。
- ・友人や親に相談する。
- ・つらい気持ちを分かってもらおうと楽しい気持ちになったり、頑張ろうという気持ちになったりする。
- ・ゲームとかサッカーと野球とか楽しいことをしていると、いやな気持ちを忘れられる。
- ・つらかったことやいやだったことについて、話を友達に聞いてもらう。つらい気持ちを分かってもらおうとさっぱりしてくる。
- ・小説やパソコンでケータイ小説を読んでいやなことを忘れる。
- ・特に変わったことをせずに、普段通りの生活をする。特にとえば寝ること。
- ・マンガを読む。読んでいる間はいやなことを忘れる。寝る。
- ・好きな歌を聴いたり、好きな TV 番組を見たりしているうちにいやなことを忘れる。
- ・失敗は誰にだってある。みんなが出来ることではないから自分が失敗したってそんなに気にすることはないと自分に言い聞かせる。特に寝る前に。
- ・関係のない楽しいことを友達と話をしたり寝たりすると、いやなことを忘れて楽しい気持ちになってくる。
- ・友達と遊ぶ（お話ししたりゲームをしたり）。引きずっているうちに忘れる。
- ・失敗した分いいことできるように頑張る。相手のことをプラスに思えるように考え方を持っていく。
- ・好きな音楽を聴くと心が安らいでつらい気持ちがだんだん明るく。自分の悪いところを探して、直そうとする。
- ・先生やお母さんに相談をする。自分の行動も振り返る。だんだん気持ちが軽くなっていく。

予備調査 2

1 目的

予備調査 1 で収集した項目の検討ならびにレジリエンス尺度項目作成のための予備データの収集

2 方法

- (1) 項目の準備：既存の中学生用レジリエンス尺度(石毛・無藤 2006) や幼児用レジリエンス尺度(高辻 2002) を参考に、小学生に理解可能な表現になるよう修正を加え、さらに予備調査 1 で収集された項目候補を加えてレジリエンス暫定尺度 39 項目を準備した。
- (2) 調査時期：2010 年 12 月

- (3) 調査対象：青森県内の公立小学校 6 年生約 53 名（男子 24 名，女子 29 名）
- (4) 手続き：質問紙を配布し学級担任の指導の下に授業時間に集団で実施。所要時間は 20～25 分程度。
- (5) 質問紙の内容：属性（性別と出席番号）と氏名およびレジリエンス暫定尺度 39 項目。
暫定尺度の回答方法は「とてもそう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「まったく思わない」の 5 段階自己評定を用いる。

3 結果

- (1) 因子構造：まず各項目の平均値と SD をもとに天井効果が疑われる項目（＝平均＋SD>5.00）を削除して因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。固有値の減衰状況並びに項目のまとまりの様子から 4 因子を抽出し，各因子に対する負荷量が.400 以上の項目を選んだ。続いて因子構造についての分析では，まず石毛・無藤（2006）の先行研究の結果に見られるような「内面共有性」「楽観性」と解釈できる 2 つの因子を見出すことができた。第 1 因子の「内面共有性」因子は，「悲しい時は自分の気持ちを誰かに聞いてもらいたいと思う」「つらい時は自分の気持ちを誰かに聞いてもらいたいと思う」「考えを人に聞いてもらいたいと思う」などの項目からなり，因子名と対応していることがうかがえる。第 3 因子の「楽観性」は，「いやなことがあった時でもくよくよしない」「困った時，考えるだけ考えたらもう悩まない」「落ち込んだままいないで，次にできることを考える」などの項目からなり，これも因子名と対応していることがうかがえる。第 2 因子は「やり始めたことは最後までやり通す」「新しい友達や先生に積極的に話しかけることができる」「友達が困っている時は進んでなぐさめてあげる」などの項目からなり，自らの行動に関わる内容が大部分を占めていることと，項目が全体的に積極的に物事に取り組む傾向を表すことから「積極活動性」と命名した。第 4 因子は「失敗してもあきらめずにもう一度挑戦する」「困った時でも，できそうなことからまず始めてみる」「苦手なことでも失敗を恐れずに取り組む」などの項目からなり，課題を遂行する際に困難があっても取り組みを途中で投げ出さないようにしようとしているという個人の構えの傾向を表すことから「挑戦性」と命名した。
- (2) 信頼性の検討：Cronbach の α 係数は，第 1 因子は $\alpha = .81$ ，第 2 因子は $\alpha = .80$ ，第 3 因子は $\alpha = .77$ ，第 4 因子は $\alpha = .70$ で，内部一貫性があると判断できる程度の数値が得られた。

本調査 1

1 目的

児童用レジリエンス尺度の作成ならびに尺度の信頼性と妥当性の検証。

2 方法

- (1) 項目の準備：予備調査 2 の結果の分析から、天井効果が疑われる項目と因子負荷量が.400 に満たなかった 13 項目を除外した，レジリエンス尺度 23 項目，松本・山崎(2007)による小学生を対象とした自尊感情尺度に調査対象の児童の実態に合わせて項目内容を修正・追加した児童用自尊感情尺度 28 項目，内藤・浅川・高瀬・古川・小泉(1986)による学校生活適応感尺度に調査対象校の教育活動の内容や児童の実態に合わせて項目内容を修正・追加した児童用学校生活適応感尺度 34 項目，Nakazawa(1997)によるライフイベント尺度に，調査対象校の教育活動の内容や児童の実態に合わせて項目内容を修正・追加した児童用ライフイベント尺度 30 項目を準備した。
- (2) 調査時期：2011 年 11 月
- (3) 調査対象：青森県内の公立小学校 4～6 年生 184 名(男子 79 名，女子 105 名)。回答に不備があった者を除く，175 名(男子 73 名，女子 102 名)を調査の分析対象とした(有効回答率 95%)。
- (4) 手続き：質問紙を配布し学級担任の指導の下に授業時間に集団で実施。所要時間は 45 分程度。
- (5) 質問紙の内容：レジリエンス尺度 23 項目と自尊感情尺度 28 項目の回答方法は「とてもそう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の 5 段階自己評定を用いる。学校生活適応感尺度 34 項目の回答方法は「とてもあてはまる」「少しあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の 5 段階自己評定を用いる。ライフイベント尺度 30 項目の回答方法は，過去 1 年間の各項目に対する経験の有無について自己申告による回答方法を用いる。

3 結果

- (1) 因子構造：まず，各項目の平均値と SD をもとに天井効果が疑われる項目について検討したが，平均+SD が 5.00 を超える数値を示す項目はあったものの（最大で平均+SD=5.13），超えた量の小ささと除外することによる項目数の減少のデメリットを考慮し，ここでは除外せずに尺度全体の因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。固有値の減衰状況並びに項目のまとまりの様子から 4 因子を抽出した。因子負荷量が小さい項目（おおよそ.40 以下）や複数の因子に同程度の負荷量を示す項目を除外した。因子構造についての分析では，予備調査 2 と同様に「内面共有性」「楽観性」「挑戦性」「積極的活動性」と解釈できる 4 つの因子を見出すことができた。(Table 1)

Table 1 レジリエンス尺度の因子分析結果（主因子法，プロマックス回転後）

	I	II	III	IV
楽観性				
14 困った時、考えるだけ考えたらもう悩まない	.76	.02	.12	-.07
19 いやなことでも、時間がたてば自然に忘れることができる	.62	-.10	-.22	.05
20 いやなことがあった時でも、くよくよしない	.57	.08	-.28	.01
21 何事もよい方向に考える	.56	.21	-.02	-.01
23 自分のまちがいやルール違反を友達から注意された時、そのことを認めて行動を正しく直すことができる	.55	.10	.24	-.12
04 困ったことが起きても、よい方向に考えるようにしている	.45	.06	.00	.24
挑戦性				
06 失敗してもあきらめずにもう一度挑戦する	.00	.75	.00	.03
01 やり始めたことは最後までやり通す	.12	.57	-.01	-.13
10 苦手なことでも失敗を恐れずに取り組む	.02	.56	-.02	.06
05 決めたら必ず実行する	.13	.54	.12	.04
08 自分に自信がある	-.08	.49	-.01	.19
内面共有性				
07 つらい時は自分の気持ちを誰かに聞いてもらいたいと思う	-.08	.00	.89	-.06
13 悲しい時は自分の気持ちを誰かに聞いてもらいたいと思う	-.01	-.01	.88	.01
15 考えを人に聞いてもらいたいと思う	-.08	.09	.45	.21
積極的活動性				
12 新しい友達や先生に積極的に話しかけることができる	-.04	-.03	.01	.78
11 新しい行事や仕事にすぐなれる方だ	-.19	.18	-.04	.69
16 自分は学校で元気に活動していると思う	.25	-.01	-.02	.45
18 何かしようと思った時、色々な方法を考える	.11	.07	.02	.41
02 困った時、友達に助けてほしいとお願いできる	.31	-.25	.21	.40
因子間相関	I	II	III	IV
I	-	.57	.17	.45
II		-	.31	.55
III			-	.27
IV				-

(2) 信頼性の検討：Cronbach の α 係数は、第 1 因子は $\alpha = .78$ 、第 2 因子は $\alpha = .76$ 、第 3 因子は $\alpha = .79$ 、第 4 因子は $\alpha = .73$ であった。ある程度の内部一貫性が認められる数値が得られた。

(3) 各尺度の検討

自尊感情尺度：因子構造を確認するため、それぞれ主因子法による因子分析を行った。自尊感情尺度に関しては、先行研究や固有値の減衰状況から 5 因子構造が妥当であると考えられ、そこで再度 5 因子を仮定して因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。因子負荷量が小さい項目（おおよそ.40 以下）や複数の因子に同程度の負荷量を示す項目を除外し、最終的に 5 因子 25 項目が採用された。そして第 1 因子「自己イメージ」、第 2 因子「家族」、第 3 因子「学業」、第 4 因子「特技・友達」、第 5 因子「願望」とそれぞれ命名された。

学校生活適応感尺度：因子構造を確認するため、それぞれ主因子法による因子分析を行った。先行研究や固有値の減衰状況から 6 因子構造が妥当であると考えられ、そこで再度 6 因子を仮定して因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。因子負荷量が小さい項目（おおよそ.40 以下）や複数の因子に同程度の負荷量を示す項目を除外し、最終的に 6 因子 28 項目が採用された。そして第 1 因子

「活動性」、第2因子「教師」、第3因子「将来の展望」、第4因子「特別活動」、第5因子「勉強」、第6因子「規則への意識」とそれぞれ命名された。

その後逆転処理を行った後で、レジリエンス尺度と自尊感情尺度・学校生活適応感尺度についてはそれぞれの合計点数を算出しレジリエンス得点・自尊感情得点・学校生活適応感得点とした。またそれぞれの尺度において、各下位因子に相当する項目の合計点数を算出した。レジリエンス尺度では内面共有性得点、挑戦性得点、肯定的な未来志向得点、楽観性得点、自尊感情尺度では自己イメージ得点、家族得点、学業得点、特技・友達得点、願望得点、学校生活適応感尺度では活動性得点、教師得点、将来の展望得点、特別活動得点、勉強得点、規則への意識得点とした。ライフイベント尺度については「経験した」に記入されている○印の個数を算出してライフイベント得点とした。各得点の平均およびSDはTable 2に示されている。

Table 2 レジリエンス尺度及びレジリエンス下位尺度と自尊感情尺度・学校適応感尺度・ライフイベント尺度の各得点の相関 (N=175)

	レジリエンス	楽観性	挑戦性	内面共有性	積極的活動性	自尊感情	学校生活適応感	ライフイベント	平均	SD
レジリエンス	-	.78 ***	.80 ***	.49 ***	.75 ***	.54 ***	.72 ***	-.02	70.14	11.08
楽観性		-	.51 ***	.07	.44 ***	.41 ***	.45 ***	-.12	21.37	4.95
挑戦性			-	.27 ***	.49 ***	.54 ***	.57 ***	-.03	17.75	3.75
内面共有性				-	.25 ***	.10	.41 ***	.10	11.41	3.10
積極的活動性					-	.45 ***	.65 ***	.04	19.61	3.58
自尊感情						-	.60 ***	-.17 *	79.06	15.29
学校生活適応感							-	-.06	101.58	17.46
ライフイベント								-	8.42	3.81

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

- (4) 各得点間の相関：各得点間の相関を Table 2 に示す。レジリエンスと楽観性、挑戦性、積極的活動性の各下位因子は自尊感情と正の有意な相関を示した。またライフイベントは自尊感情と負の有意な相関を示したが、レジリエンス及びその下位因子、学校適応感とは無相関であった。これは小塩ら(2002)の調査結果と一致している。自尊感情はライフイベントと有意な負の相関を示すという点で、過去のネガティブなライフイベントの経験と関連があると考えられる。しかしレジリエンスは下位尺度も含めてライフイベントとの関連が見出せなかったという点で、自尊感情で測定される精神的健康とはやや異なる面を測定しているという小塩ら(2002)の考えを支持する結果が得られた。一方、学校適応感に関してはレジリエンスとその全ての下位因子及び自尊感情と有意な正の相関を示した。学校適応感は自尊感情とは相関があるものの、ライフイベントや内面共有性との関連において異なる結果を示していることから、自尊感情とは違った側面を測定している概念であることが示唆され、精神的健康の指標として特に学校教育の場では無視できない変数であると考えられる。

Table 3 レジリエンス尺度と自尊感情尺度，学校生活適応感尺度，ライフイベント尺度との相関分析の結果及び各尺度と下位尺度得点の平均値及び標準偏差

	レジリエンス				レジリエンス	平均	SD
	楽観性	挑戦性	内面共有性	積極的活動性	総得点		
自尊感情							
自尊感情総得点	.41 ***	.54 ***	.10	.45 ***	.54 ***	79.06	15.29
自己イメージ	.39 ***	.52 ***	.17 *	.40 ***	.53 ***	25.89	7.14
家族	.28 ***	.27 ***	-.07	.20 **	.26 ***	21.43	5.62
学業	.07	.40 ***	.19 *	.24 **	.30 ***	11.45	3.86
特技・友達	.32 ***	.34 ***	.07	.50 ***	.44 ***	15.16	3.39
願望	.22 **	.17 *	-.12	.08	.15	5.14	2.17
学校適応感							
学校生活適応感総得点	.45 ***	.57 ***	.41 ***	.65 ***	.72 ***	101.58	17.46
活動性	.39 ***	.39 ***	.07	.53 ***	.50 ***	22.72	5.06
教師	.27 ***	.45 ***	.43 ***	.58 ***	.58 ***	20.59	5.67
将来の展望	.20 **	.21 **	.35 ***	.25 ***	.34 ***	13.83	4.62
特別活動	.36 ***	.42 ***	.21 **	.61 ***	.56 ***	16.02	3.54
勉強	.27 ***	.52 ***	.30 ***	.35 ***	.50 ***	12.38	3.74
規則への意識	.39 ***	.39 ***	.31 ***	.28 ***	.48 ***	16.04	2.84
ライフイベント							
ライフイベント総得点	-.12	-.03	.10	.04	-.02	8.42	3.81

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

レジリエンス尺度と自尊感情尺度，学校生活適応感尺度，ライフイベント尺度との相関分析の結果及び各尺度と下位尺度得点の平均値及び標準偏差をTable 3に示す。レジリエンス総得点は自尊感情尺度総得点と「願望」を除いた自尊感情尺度各下位尺度得点及び学校生活適応感尺度と学校生活適応感各下位尺度の得点と有意な正の相関があった。一方，レジリエンスは総得点，各下位尺度ともにイベントとは無相関であった。

レジリエンス下位因子の「楽観性」「挑戦性」「積極的活動性」については，自尊感情尺度，学校適応感尺度の総得点及びほとんどの各下位尺度得点との正の相関を見出すことができた。レジリエンスの「内面共有性」については学校適応感尺度とそのほとんどの下位尺度との正の相関を見出すことができたが，自尊感情得点とその下位尺度得点との間では自尊感情下位因子の「自己イメージ」と「学業」のみに正の相関を見出すことができた。

この結果から，自尊感情と学校生活適応感の間ではレジリエンスとの相関の様相において相違点があることが確認された。

Table 4 レジリエンス尺度・自尊感情尺度・学校生活適応感尺度・ライフイベント尺度の学年別・性別平均値及びSDと分散分析の結果

学年 性別(人数)	4年		5年		6年生		主効果		交互作用						
	男子(N=28) 平均値	女子(N=36) SD	男子(N=23) 平均値	女子(N=29) SD	男子(N=22) 平均値	女子(N=37) SD	学年 (F値)	性別 (F値)	(F値)						
レジリエンス															
レジリエンス総得点	73.86	12.72	71.75	12.65	67.65	10.03	69.97	9.31	72.18	8.00	66.22	10.70	2.41	1.31	1.92
楽観性	22.96	5.07	21.11	6.37	21.17	4.74	21.41	4.52	21.82	3.76	20.24	4.30	0.66	1.94	0.71
挑戦性	19.29	4.47	18.03	3.98	16.87	3.43	17.93	3.37	18.64	2.84	16.19	3.41	2.31	2.45	3.16 **
内面共有性	11.36	3.34	12.22	2.36	9.83	3.20	11.34	3.29	11.50	3.16	11.62	3.14	2.38	3.13	0.69
積極的活動性	20.25	4.53	20.39	3.28	19.78	2.32	19.28	3.40	20.23	2.58	18.16	4.07	1.59	2.22	1.48
自尊感情															
自尊感情総得点	86.64	15.11	80.42	13.91	75.35	16.48	76.03	15.31	82.23	14.92	74.81	14.31	4.10 *	3.53	1.15
自己イメージ	29.86	8.23	28.50	6.69	23.48	5.93	23.52	6.64	26.36	7.90	23.43	5.15	11.29 ***	1.86	0.65
家族	22.43	4.64	21.14	5.08	21.26	7.44	21.07	5.85	22.05	5.73	20.97	5.49	0.17	0.95	0.14
学業	13.43	3.68	11.44	3.63	9.96	3.01	11.21	4.49	11.55	3.62	11.00	3.95	3.53 *	0.53	2.58
特技・友達	15.32	3.74	14.97	3.33	15.00	3.41	15.10	3.18	16.45	3.33	14.59	3.36	0.30	1.80	1.25
願望	5.61	2.38	4.36	2.13	5.65	2.08	5.14	2.43	5.82	1.97	4.81	1.79	0.61	7.87 **	0.42
学校適応感															
学校適応感総得点	103.93	19.94	107.92	15.01	94.52	15.00	102.69	17.41	104.50	15.37	95.43	18.01	3.09 *	0.15	3.81 *
活動性	23.93	5.86	22.92	4.64	20.65	5.86	22.93	5.48	23.82	3.51	22.08	4.51	1.54	0.04	2.41
教師	22.14	5.20	23.19	5.26	19.13	4.59	19.55	6.62	21.32	4.00	18.19	5.91	6.58 **	0.43	2.44
将来	12.79	4.95	13.36	4.50	14.13	4.41	14.97	4.00	15.36	4.56	13.11	4.94	1.68	0.16	1.93
特別活動	15.68	4.00	17.92	2.25	15.22	2.58	16.24	3.39	16.09	3.61	14.70	4.16	2.74	1.41	4.23 *
勉強	13.07	4.13	13.47	3.85	10.04	2.92	12.72	4.05	12.23	3.57	12.05	3.10	3.92 *	2.98	2.28
規則	16.32	3.19	17.06	2.37	15.35	3.35	16.28	2.33	15.68	3.20	15.30	2.61	2.92	0.97	0.88
ライフイベント															
ライフイベント総得点	8.07	2.68	7.92	3.00	8.87	4.58	9.00	4.03	7.45	3.50	9.03	4.68	0.90	0.77	0.83

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

(5) 性差・学年差の検討

レジリエンス尺度と自尊感情尺度、学校生活適応感尺度、ライフイベント尺度の各得点の学年差および性差を調べるために学年(3)×性(2)を要因とする分散分析を行った(Table 4)。

交互作用の分析では、レジリエンス尺度の「挑戦性」において、6年生における性別の単純主効果が有意で女子よりも男子の方が有意に高かった($F(1, 169)=6.18, p<.05$)。また学校生活適応感尺度の「学校生活適応感総得点」において、6年生における性別の単純主効果が有意で女子よりも男子の方が有意に高かった($F(1, 169)=3.94, p<.05$)。学校適応感尺度の「学校生活適応感総得点」において、女子における学年の単純主効果が有意で6年生よりも4年生の方が有意に高かった($F(1, 169)=4.98, p<.01$)。学校生活適応感尺度の「特別活動」において、4年生における性別の単純主効果が有意で男子よりも女子の方が有意に高かった($F(1, 169)=6.76, p<.05$)。

学年差の検討では、自尊感情尺度の「自尊感情総得点」および「自己イメージ」「学業」で学年の主効果が有意だったためTukey法による多重比較を行ったところ、「自尊感情総得点」において5年生より4年生の方が、「自己イメージ」において5、6年生より4年生の方が有意に高かった。学校生活適応感尺度の「学校生活適応感総得点」および「教師」「勉強」で学年の主効果が有意だったためTukey法による多重比較を行ったところ、「学校生活適応感総得点」において6年生より4年生の方が、「教師」において5、6年生より4年生の方が、「勉強」において5年生より4年生の方が有意に高かった。

性差の検討では、自尊感情尺度の「願望」において性の主効果が有意で、女子より男子の得点が高かった。

学年間において有意差が出た全ての場合において、上学年になるにつれて得点が低くなる傾向が認められた。これは思春期に向かう発達の自然な変化の可能性が推測される。全体として学年差も性差も少ないものと判断して、今後の分析は学年・性別を分けずに行うこととする。

(6) 学校生活適応感・自尊感情を従属変数とした、分散分析による妥当性の検証

○ライフイベント総数による分析

まずレジリエンスについては平均値によって被調査者をほぼ 2 分し、ライフイベント経験数については平均値±1/2SD によって被調査者をほぼ 3 分した。そして学校適応感尺度と自尊感情の得点をそれぞれ従属変数とした 2 (レジリエンスおよび各下位尺度) についての上位・下位)×3 (ライフイベント経験数上位・中位・下位) の分散分析を行った。学校生活適応感尺度を従属変数とした際の分散分析結果を Table 5 に示す。その結果、いずれの得点もレジリエンスとその下位因子の主効果が有意であり、ライフイベントの主効果及び交互作用は有意ではなかった。レジリエンスと下位因子 5 群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感の得点を図示したものが Figs.1~5 である。

Table 5 学校適応感尺度に関する2要因分散分析の分析及び平均, 標準偏差

							SS	df	MS	検定	
レジリエンス低群							レジリエンス	15644.17	1	15644.17	F=73.53, p<.001
ライフイベント低群 ライフイベント中群 ライフイベント高群							ライフイベント	403.10	2	201.55	F=0.95
n	38	29	25	21	44	18	交互作用	380.70	2	190.35	F=0.89
平均	92.66	94.90	89.12	115.00	110.73	110.50	残差	35957.11	169	212.76	
SD	15.04	14.51	17.52	13.32	14.62	9.68	合計	53054.55	174		
レジリエンス高群											
ライフイベント低群 ライフイベント中群 ライフイベント高群											
n	32	32	23	27	41	20					
平均	96.16	98.25	89.52	105.89	109.27	107.90					
SD	18.03	15.24	17.08	16.65	15.88	13.97					
楽観性低群											
ライフイベント低群 ライフイベント中群 ライフイベント高群											
n	31	31	22	28	42	21					
平均	89.84	94.45	91.59	112.54	111.81	104.86					
SD	13.93	15.02	17.39	13.97	13.36	16.59					
楽観性高群											
ライフイベント低群 ライフイベント中群 ライフイベント高群											
n	31	31	22	28	42	21					
平均	89.84	94.45	91.59	112.54	111.81	104.86					
SD	13.93	15.02	17.39	13.97	13.36	16.59					
挑戦性低群											
ライフイベント低群 ライフイベント中群 ライフイベント高群											
n	31	31	22	28	42	21					
平均	89.84	94.45	91.59	112.54	111.81	104.86					
SD	13.93	15.02	17.39	13.97	13.36	16.59					
挑戦性高群											
ライフイベント低群 ライフイベント中群 ライフイベント高群											
n	31	31	22	28	42	21					
平均	89.84	94.45	91.59	112.54	111.81	104.86					
SD	13.93	15.02	17.39	13.97	13.36	16.59					
内面共有性低群											
ライフイベント低群 ライフイベント中群 ライフイベント高群											
n	34	23	17	25	50	26					
平均	93.91	95.83	94.06	109.72	108.40	100.69					
SD	16.50	16.00	18.69	15.92	15.21	17.55					
内面共有性高群											
ライフイベント低群 ライフイベント中群 ライフイベント高群											
n	28	27	20	31	46	23					
平均	90.29	93.85	89.15	109.94	110.65	105.83					
SD	13.22	16.12	18.64	16.60	13.25	13.76					
積極的活動性低群											
ライフイベント低群 ライフイベント中群 ライフイベント高群											
n	28	27	20	31	46	23					
平均	90.29	93.85	89.15	109.94	110.65	105.83					
SD	13.22	16.12	18.64	16.60	13.25	13.76					
積極的活動性高群											
ライフイベント低群 ライフイベント中群 ライフイベント高群											
n	28	27	20	31	46	23					
平均	90.29	93.85	89.15	109.94	110.65	105.83					
SD	13.22	16.12	18.64	16.60	13.25	13.76					
							レジリエンス	15644.17	1	15644.17	F=73.53, p<.001
							ライフイベント	403.10	2	201.55	F=0.95
							交互作用	380.70	2	190.35	F=0.89
							残差	35957.11	169	212.76	
							合計	53054.55	174		
							楽観性	7042.57	1	7042.57	F=26.63, p<.001
							ライフイベント	711.83	2	355.91	F=1.35
							交互作用	520.83	2	260.42	F=0.99
							残差	44690.47	169	264.44	
							合計	53054.55	174		
							挑戦性	13095.20	1	13095.20	F=59.77, p<.001
							ライフイベント	646.05	2	323.03	F=1.47
							交互作用	571.62	2	285.81	F=1.30
							残差	37029.20	169	219.11	
							合計	53054.55	174		
							内面共有性	5326.79	1	5326.79	F=19.86, p<.001
							ライフイベント	650.27	2	325.14	F=1.21
							交互作用	508.27	2	254.13	F=0.95
							残差	45329.56	169	268.22	
							合計	53054.55	174		
							積極的活動性	12815.84	1	12815.84	F=56.38, p<.001
							ライフイベント	599.76	2	299.88	F=1.31
							交互作用	80.78	2	40.39	F=0.18
							残差	38415.28	169	227.31	
							合計	53054.55	174		

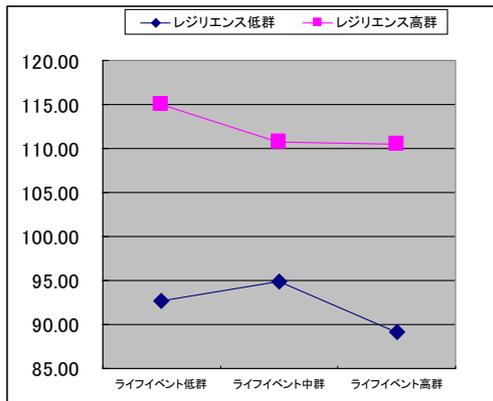


Fig 1 レジリエンス得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

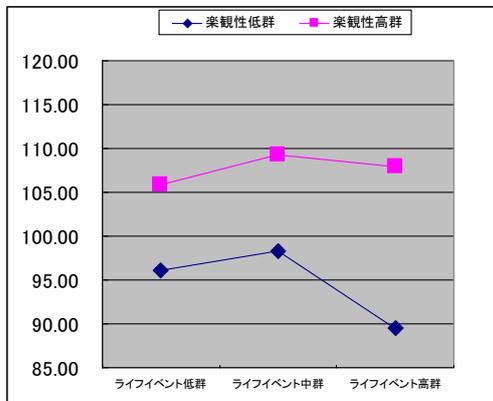


Fig 2 楽観性得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

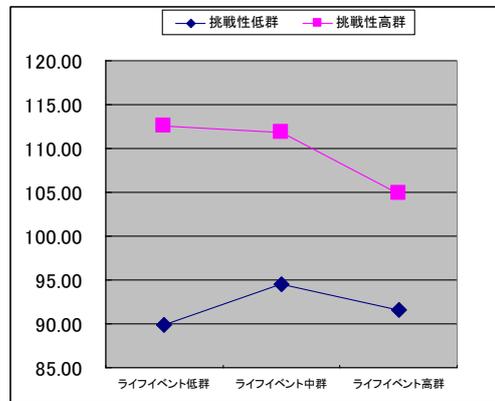


Fig 3 挑戦性得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

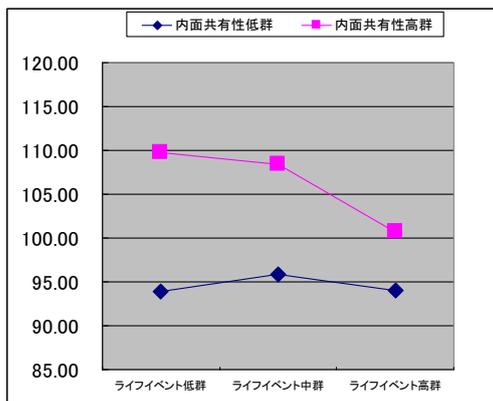


Fig 4 内面共有性得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

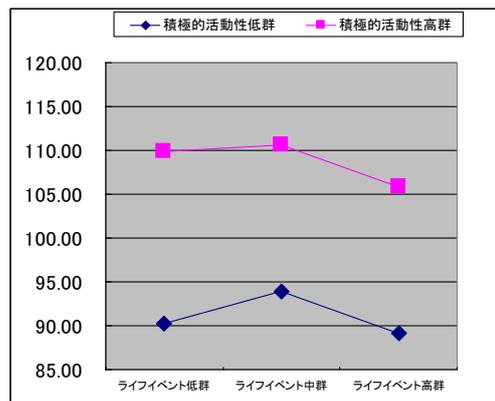


Fig 5 積極的活動性得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

Figs.1~5 から、レジリエンスと各下位因子のいずれにおいても、低群よりも高群の方が高い学校適応感を示している。これはレジリエンスの低い者よりも高い者の方が学校生活に適応しているという主観的な感覚を有していることを示している。中でも楽観性高群はネガティブなライフイベントの回数が中程度から高程度に増えたとしても、高い学校適応感を維持していると見ることができる。そこで楽観性因子について、平均値によって被調査者をほぼ 2 分し、ライフイベント経験数についてはこれまでと同様に平均値±1/2SD によって被調査者をほぼ 3 分し、学校適応感尺度及び学校適応感尺度の各下位因子の得点を従属変数とした 2(楽観性の上位・下位)×3(ライフイベント経験数上位・中位・下位)の分散分析を行った(Table 6)。その結果いずれの得点も楽観性の主効果が有意であり、ライフイベントの主効果は有意ではなかった。そして将来得点において交互作用が有意であった($F(2,169)=4.26, p<.05$)。

Table 6 学校適応感尺度及び学校適応感尺度各下位因子得点に関する2要因分散分析の分析結果及び平均、標準偏差 (楽観性)

楽観性 ライフイベント	低群						高群						主効果(F値)		
	低群		中群		高群		低群		中群		高群		楽観性	ライフイベント	交互作用(F値)
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
学校適応感	96.16	18.03	98.25	15.24	89.52	17.08	105.89	16.65	109.27	15.88	107.90	13.97	26.63 ***	1.35	0.98
活動性	20.63	5.59	21.66	4.63	20.22	5.43	24.52	3.77	24.78	4.24	24.00	4.95	23.65 ***	0.77	0.12
教師	19.44	5.04	19.94	5.58	18.30	6.86	20.70	5.91	22.85	5.07	21.35	5.01	7.81 **	1.42	0.46
将来	13.75	5.12	13.56	4.34	11.61	4.78	13.07	5.45	14.71	3.80	16.20	3.12	5.79 *	0.42	4.26 *
特別活動	15.03	3.19	15.81	3.43	13.87	4.59	17.07	2.89	17.20	2.82	16.55	3.80	14.83 ***	1.94	0.50
勉強	11.97	4.24	11.94	3.28	11.13	3.03	13.56	4.34	12.37	3.79	13.60	2.89	6.76 *	0.44	1.08
規則	15.34	2.84	15.34	2.79	14.39	2.78	16.96	2.68	17.37	2.42	16.20	2.67	18.99 ***	2.19	0.09
n	32		32		23		27		41		20				

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

次に交互作用が有意であった将来得点について単純主効果の検定を行った。その結果ライフイベント高群において楽観性の単純主効果($F(1,169)=11.09, p<.05$)が有意であった。楽観性得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感及び学校適応感各下位因子の得点を図示したものが Figs.6~12 である。

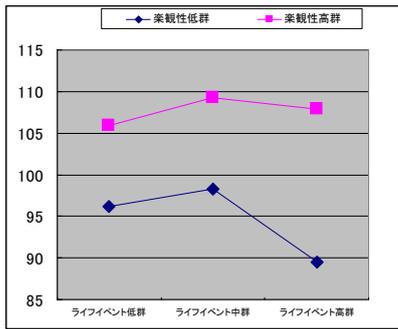


Fig 6 楽観性得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

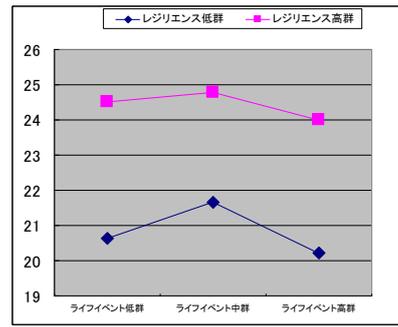


Fig 7 楽観性得点群・ライフイベント得点群条件にみた活動性得点の平均値

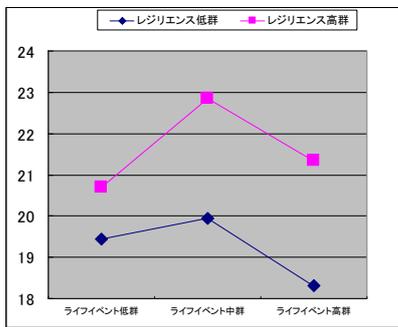


Fig 8 楽観性得点群・ライフイベント得点群条件にみた教師得点の平均値

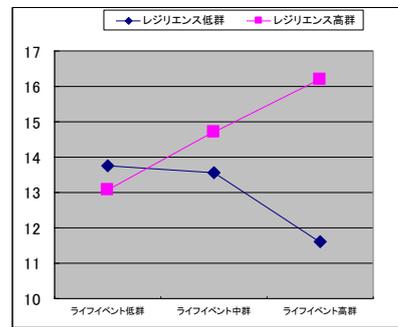


Fig 9 楽観性得点群・ライフイベント得点群条件にみた将来得点の平均値

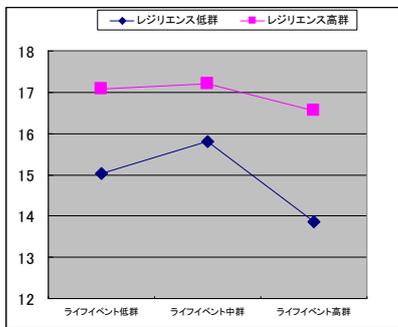


Fig 10 楽観性得点群・ライフイベント得点群条件にみた特別活動得点の平均値

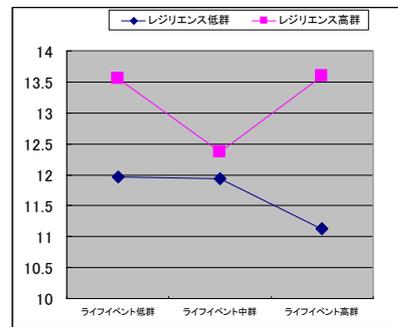


Fig 11 楽観性得点群・ライフイベント得点群条件にみた勉強得点の平均値

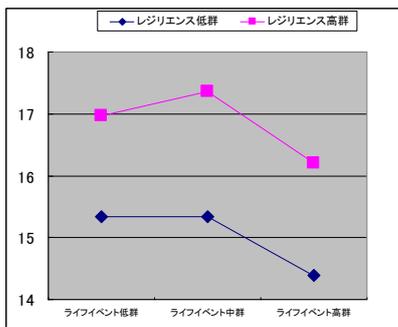


Fig 12 楽観性得点群・ライフイベント得点群条件にみた規則得点の平均値

楽観性因子について行ったものと同様な分析を他のレジリエンス各下位因子について行った。挑戦性，内面共有性，積極的活動性の平均値によって被調査者をほぼ2分し，ライフイベント経験数についてはこれまでと同様に平均値±1/2SDによって被調査者をほぼ3分し，学校適応感尺度及び学校適応感尺度の各下位因子の得点を従属変数とした2(挑戦性，内面共有性，積極的活動性の上位・下位)×3(ライフイベント経験数上位・中位・下位)の分散分析を行った(Table 7~9)。その結果いずれの得点も挑戦性，内面共有性，積極的活動性の主効果が有意であり，ライフイベントの主効果および交互作用は有意ではなかった。

Table 7 学校適応感尺度及び学校適応感尺度各下位因子得点に関する2要因分散分析の分析結果及び平均，標準偏差 (挑戦性)

挑戦性 ライフイベント	低群						高群						主効果(F値)		
	低群		中群		高群		低群		中群		高群		挑戦性	ライフイベント	交互作用(F値)
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
学校適応感	89.84	13.93	94.45	15.02	91.59	17.39	112.54	13.97	111.81	13.36	104.86	16.59	59.77***	1.47	1.30
活動性	20.45	5.44	21.81	4.41	20.64	4.38	24.57	3.95	24.60	4.52	23.38	6.26	18.52***	0.87	0.38
教師	17.32	4.95	19.03	5.74	17.68	6.50	23.00	4.35	23.45	4.45	21.86	5.18	35.49***	1.30	0.34
将来	12.23	5.59	12.94	4.27	13.27	4.65	14.79	4.55	15.14	3.67	14.24	4.74	7.31**	0.22	0.41
特別活動	14.29	3.02	15.23	3.46	13.86	4.43	17.82	2.25	17.60	2.51	16.43	4.07	31.48***	2.07	0.56
勉強	10.55	3.67	10.48	3.17	11.64	3.59	15.07	3.74	13.43	3.33	12.95	2.62	30.87***	1.02	2.80
規則	15.00	2.82	14.97	2.82	14.50	3.02	17.29	2.43	17.60	2.13	16.00	2.49	28.13***	2.30	0.64
n	31		31		22		28		42		21				

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

Table 8 学校適応感尺度及び学校適応感尺度各下位因子得点に関する2要因分散分析の分析結果及び平均，標準偏差 (内面共有性)

内面共有性 ライフイベント	低群						高群						主効果(F値)		
	低群		中群		高群		低群		中群		高群		内面共有性	ライフイベント	交互作用(F値)
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
学校適応感	93.91	16.50	95.83	16.00	94.06	18.69	109.72	15.92	108.40	15.21	100.69	17.55	19.86***	1.21	0.95
活動性	21.62	5.74	22.87	4.26	22.76	4.40	23.48	4.18	23.66	4.85	21.46	6.13	0.31	0.70	1.19
教師	18.03	4.90	18.35	5.01	18.12	6.20	22.72	5.05	23.06	5.04	20.77	6.07	22.52***	0.72	0.57
将来	11.94	5.36	13.17	3.93	12.71	4.93	15.48	4.40	14.68	4.07	14.42	4.45	9.74**	0.09	0.87
特別活動	15.35	3.15	15.78	3.33	14.76	3.82	16.80	3.14	16.96	3.04	15.35	4.81	3.64	1.83	0.19
勉強	11.53	4.33	10.83	3.35	11.71	2.95	14.28	3.85	12.80	3.51	12.65	3.33	10.55**	1.38	0.74
規則	15.44	2.88	14.83	3.19	14.00	2.57	16.96	2.64	17.24	2.18	16.04	2.76	21.91***	2.65	0.43
n	34		23		17		25		50		26				

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

Table 9 学校適応感尺度及び学校適応感尺度各下位因子得点に関する2要因分散分析の分析結果及び平均，標準偏差 (積極的活動性)

積極的活動性 ライフイベント	低群						高群						主効果(F値)		
	低群		中群		高群		低群		中群		高群		積極的活動性	ライフイベント	交互作用(F値)
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
学校適応感	90.29	13.22	93.85	16.12	89.15	18.64	109.94	16.60	110.65	13.25	105.83	13.76	56.38***	1.32	0.18
活動性	20.50	5.41	21.30	4.91	19.30	5.82	24.13	4.37	24.65	4.06	24.30	4.02	29.56***	0.85	0.43
教師	17.14	4.83	18.70	5.82	16.05	6.09	22.61	4.65	23.26	4.50	22.91	4.27	52.37***	1.41	0.71
将来	11.54	5.57	12.70	4.49	13.55	4.71	15.16	4.33	15.09	3.55	13.91	4.73	9.16**	0.24	1.64
特別活動	13.93	2.79	14.93	3.46	13.80	5.07	17.81	2.33	17.57	2.53	16.26	3.44	35.93***	1.92	0.82
勉強	11.39	3.88	10.93	3.44	11.70	3.66	13.87	4.42	12.91	3.45	12.78	2.70	10.50**	0.60	0.46
規則	15.79	2.38	15.30	3.17	14.75	3.06	16.35	3.25	17.17	2.24	15.65	2.64	6.68**	1.98	0.96
n	28		27		20		31		46		23				

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

その結果いずれの得点も挑戦性，内面共有性，積極的活動性の主効果が有意であり，ライフイベントの主効果および交互作用は有意ではなかった。挑戦性，内面共有性，積極的活動性の各得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感及び学校適応感各下位因子の得点を図示したものが Figs.13~33 である。

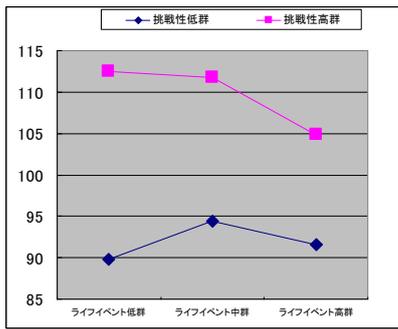


Fig 13 挑戦性得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

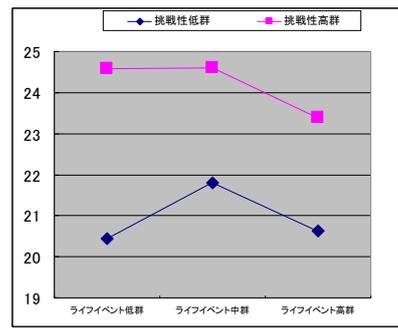


Fig 14 挑戦性得点群・ライフイベント得点群条件にみた活動性得点の平均値

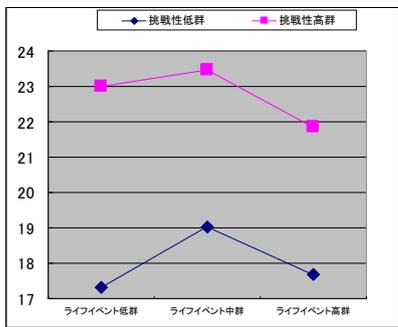


Fig 15 挑戦性得点群・ライフイベント得点群条件にみた教師得点の平均値

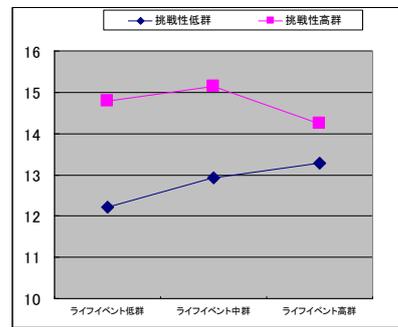


Fig 16 挑戦性得点群・ライフイベント得点群条件にみた将来得点の平均値

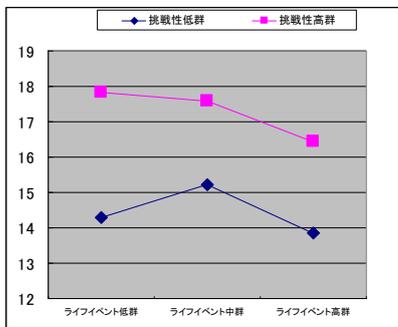


Fig 17 挑戦性得点群・ライフイベント得点群条件にみた特別活動得点の平均値

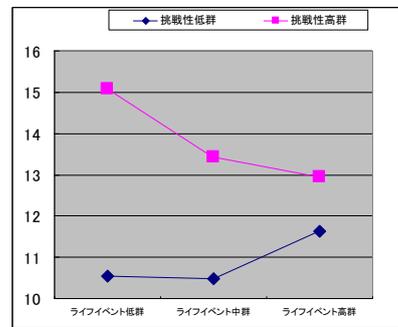


Fig 18 挑戦性得点群・ライフイベント得点群条件にみた勉強得点の平均値

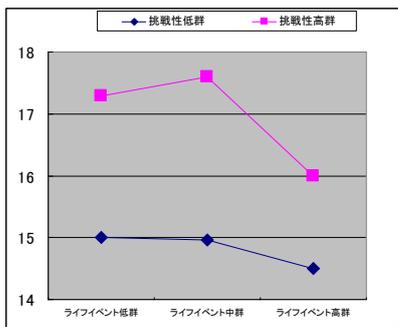


Fig 19 挑戦性得点群・ライフイベント得点群条件にみた規則得点の平均値

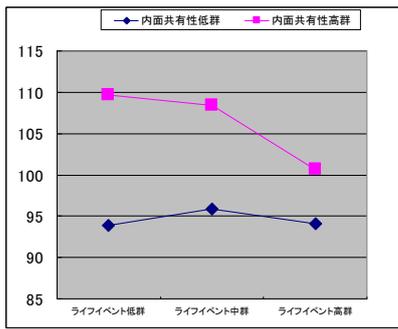


Fig 20 内面共有性得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均

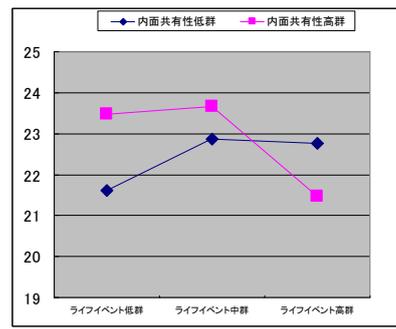


Fig 21 内面共有性得点群・ライフイベント得点群条件にみた活動性得点の平均値

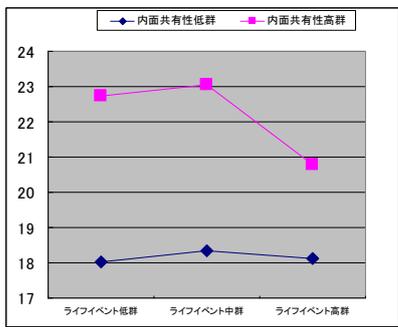


Fig 22 内面共有性得点群・ライフイベント得点群条件にみた教師得点の平均値

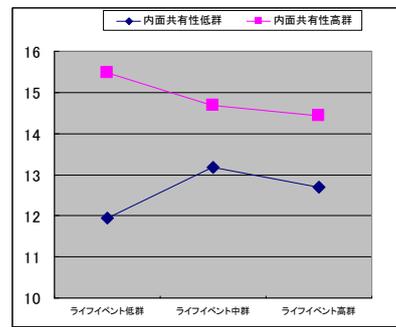


Fig 23 内面共有性得点群・ライフイベント得点群条件にみた将来得点の平均値

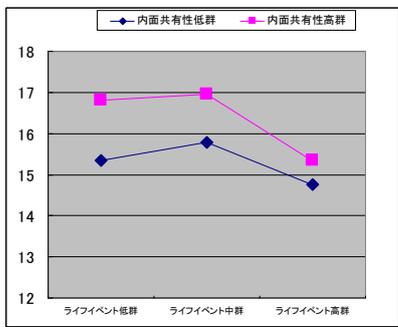


Fig 24 内面共有性得点群・ライフイベント得点群条件にみた特別活動得点の平均値

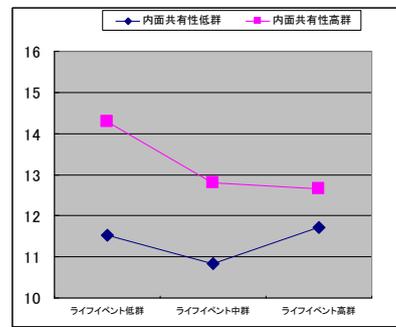


Fig 25 内面共有性得点群・ライフイベント得点群条件にみた勉強得点の平均値

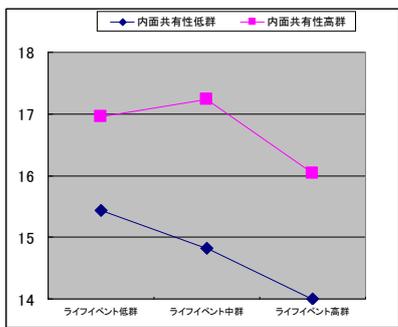


Fig 26 内面共有性得点群・ライフイベント得点群条件にみた規則得点の平均値

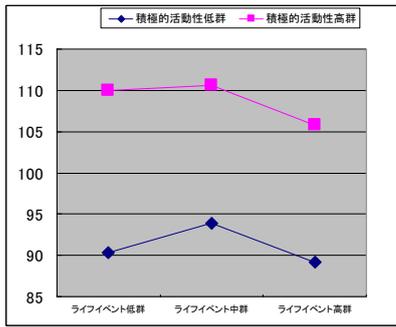


Fig 27 積極的活動性得点群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

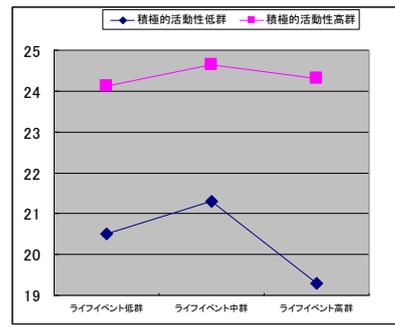


Fig 28 積極的活動性得点群・ライフイベント得点群条件にみた活動性得点の平均値

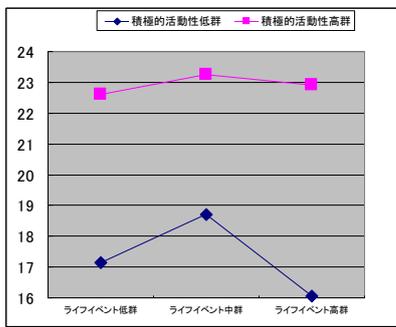


Fig 29 積極的活動性得点群・ライフイベント得点群条件にみた教師得点の平均値

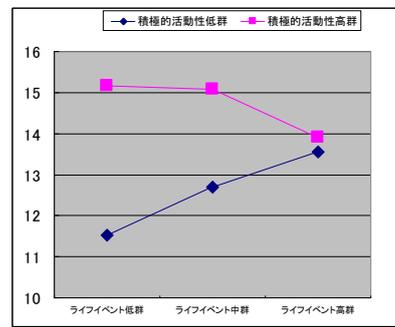


Fig 30 積極的活動性得点群・ライフイベント得点群条件にみた将来得点の平均値

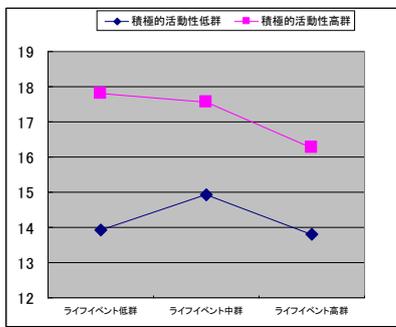


Fig 31 積極的活動性得点群・ライフイベント得点群条件にみた特別活動得点の平均値

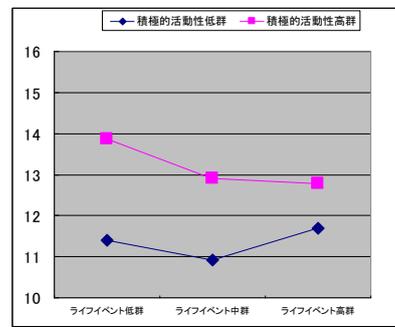


Fig 32 積極的活動性得点群・ライフイベント得点群条件にみた勉強得点の平均値

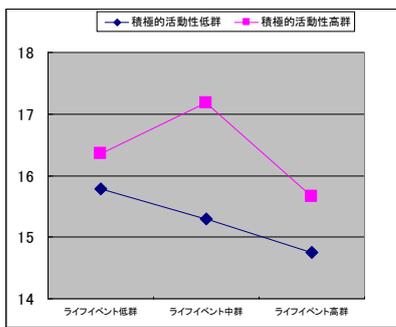


Fig 33 積極的活動性得点群・ライフイベント得点群条件にみた規則得点の平均値

続いてライフイベントを学校・友達に関わるものと家庭に関わるものとに分類し、それぞれの場合について、学校適応感尺度を従属変数とした2(レジリエンスおよび各下位尺度についての上位・下位)×3(ライフイベント経験数上位・中位・下位)の分散分析を行った。

○学校、友達に関わるライフイベントによる分析

学校生活適応感尺度を従属変数とした際の分散分析結果を Table 10 に示す。その結果、いずれの得点もレジリエンスとその下位因子の主効果が有意であり、ライフイベントの主効果及び交互作用は有意ではなかった。レジリエンスと下位因子 5 群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感の得点を図示したものが Figs.34~38 である。

Table 10 学校適応感尺度に関する2要因分散分析の分析結果及び平均、標準偏差

			レジリエンス低群			レジリエンス高群			SS	df	MS	検定
			ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	レジリエンス			
n			33	31	28	21	41	21	16609.67	1	16609.67	F=78.24 p<.001
平均			92.73	91.61	92.89	117.00	109.54	110.86	ライフイベント		555.56	2 277.78 F=1.31
SD			15.17	15.15	17.01	10.94	14.70	11.81	交互作用		359.20	2 179.60 F=0.85
			楽観性低群			楽観性高群			残差		35879.35	169 212.30
n			27	37	23	27	35	26	合計		53054.55	174
平均			97.30	95.38	92.35	107.04	108.63	107.88	楽観性		7014.65	1 7014.65 F=26.00 p<.001
SD			18.37	16.60	16.18	16.71	15.45	15.18	ライフイベント		135.59	2 67.79 F=0.25
			挑戦性低群			挑戦性高群			交互作用		221.40	2 110.70 F=0.41
n			27	33	24	27	39	25	残差		45599.34	169 269.82
平均			90.67	90.58	95.46	113.67	111.33	105.52	合計		53054.55	174
SD			15.10	14.41	16.55	12.78	13.43	17.00	挑戦性		13683.13	1 13683.13 F=62.67 p<.001
			内面共有性低群			内面共有性高群			ライフイベント		79.52	2 39.76 F=0.18
n			28	31	15	26	41	34	交互作用		1236.27	2 618.13 F=2.83
平均			93.07	96.06	94.13	111.96	106.17	103.44	残差		36900.93	169 218.35
SD			17.09	16.92	16.15	13.59	16.44	17.33	合計		53054.55	174
			積極的活動性低群			積極的活動性高群			内面共有性		6466.25	1 6466.25 F=24.03 p<.001
n			23	31	21	31	41	28	ライフイベント		328.81	2 164.41 F=0.61
平均			91.09	89.06	94.71	110.39	111.46	105.00	交互作用		754.97	2 377.48 F=1.40
SD			14.33	14.45	18.95	16.20	12.32	14.93	残差		45468.61	169 269.05
									合計		53054.55	174
									積極的活動性		12527.54	1 12527.54 F=55.80 p<.001
									ライフイベント		19.59	2 9.79 F=0.04
									交互作用		1077.91	2 538.96 F=2.40
									残差		37939.53	169 224.49
									合計		53054.55	174

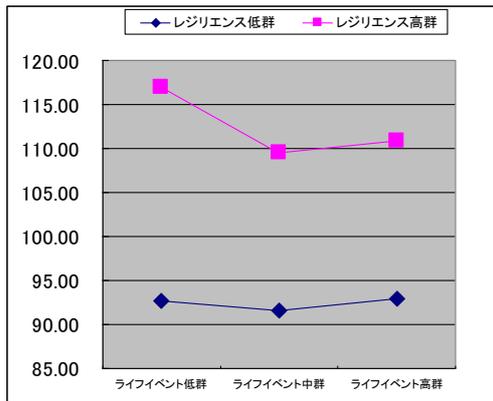


Fig 34 レジリエンス得点群・学校友達ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

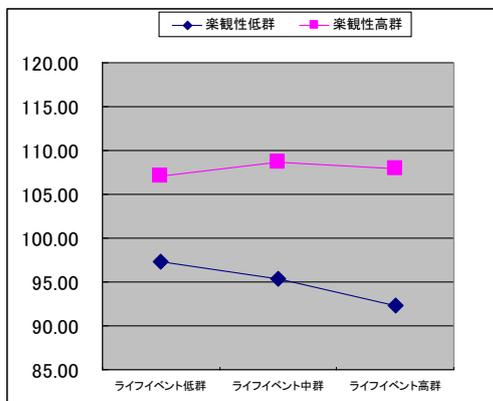


Fig 35 楽観性得点群・学校友達ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

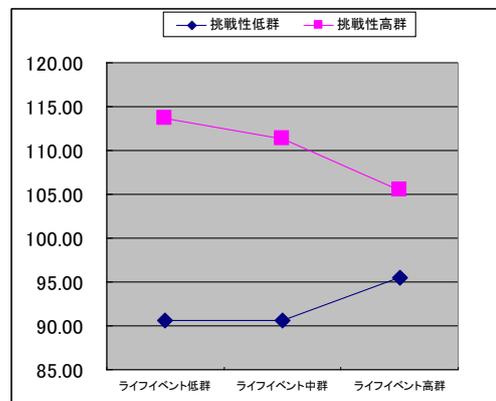


Fig 36 挑戦性得点群・学校友達ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

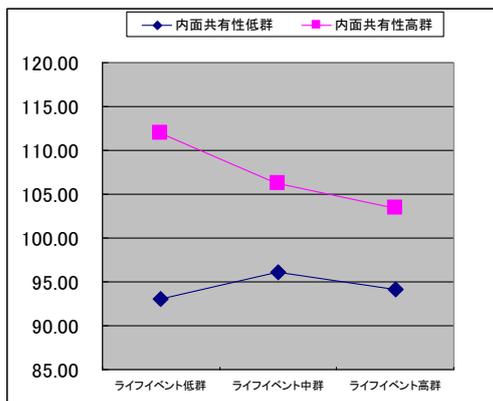


Fig 37 内面共有性得点群・学校友達ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

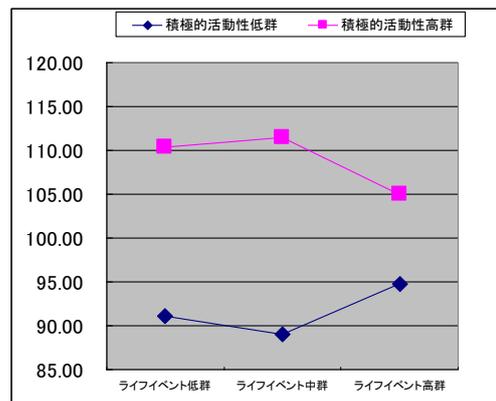


Fig 38 積極的活動性得点群・学校友達ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

○家庭に関わるライフイベントによる分析

学校生活適応感尺度を従属変数とした際の分散分析結果をTable 11に示す。その結果、いずれの得点もレジリエンスとその下位因子の主効果が有意であり、ライフイベントの主効果及び交互作用は有意ではなかった。レジリエンスと下位因子5群・ライフイベント得点群条件にみた学校適応感の得点を図示したものがFigs.39~43である。

Table 11 学校適応感尺度に関する2要因分散分析の分析結果及び平均、標準偏差

		レジリエンス低群			レジリエンス高群			SS	df	MS	検定
		ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	レジリエンス			
n		39	31	22	30	36	17	14973.27	1	14973.27	F=69.30,p<.001
平均		92.36	93.45	91.00	110.67	113.08	110.88	165.46	2	82.73	F=0.38
SD		14.03	17.49	15.95	16.23	11.77	11.24	21.03	2	10.51	F=0.05
		楽観性低群			楽観性高群			残差			
		ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	合計			
n		34	32	21	35	35	18	53054.55	174	53054.55	7593.83 F=28.69,p<.001
平均		95.76	97.53	90.62	104.74	109.91	110.22	480.19	2	240.09	F=0.91
SD		17.20	17.41	15.77	16.85	15.80	12.01	702.30	2	351.15	F=1.33
		挑戦性低群			挑戦性高群			残差			
		ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	合計			
n		34	30	20	35	37	19	11712.51	1	11712.51	F=53.91,p<.001
平均		88.97	93.27	95.25	111.34	112.70	104.32	363.97	2	181.98	F=0.84
SD		13.33	16.97	15.37	13.62	12.74	18.05	1138.21	2	569.10	F=2.62
		内面共有性低群			内面共有性高群			残差			
		ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	合計			
n		36	22	16	33	45	23	4926.01	1	4926.01	F=18.10,p<.001
平均		94.03	94.32	96.00	107.18	108.73	102.22	134.59	2	67.29	F=0.25
SD		15.41	18.88	17.17	17.25	15.00	17.01	424.62	2	212.31	F=0.78
		積極的活動性低群			積極的活動性高群			残差			
		ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	合計			
n		33	24	18	36	43	21	12166.62	1	12166.62	F=53.52,p<.001
平均		92.03	89.67	92.00	107.92	112.00	106.24	71.53	2	35.76	F=0.16
SD		14.97	16.70	16.62	16.29	12.30	14.99	502.44	2	251.22	F=1.11
		残差			残差			合計			
		合計			合計			合計			
		53054.55			53054.55			53054.55	174	53054.55	174

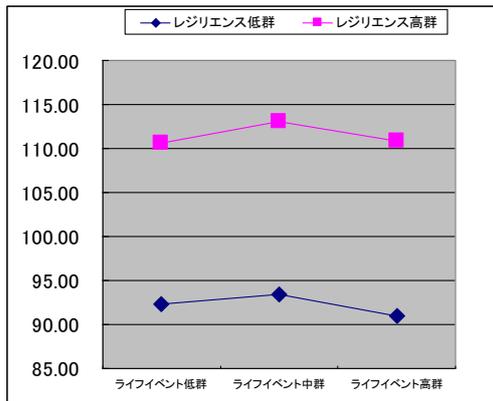


Fig 39 レジリエンス得点群・家庭ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

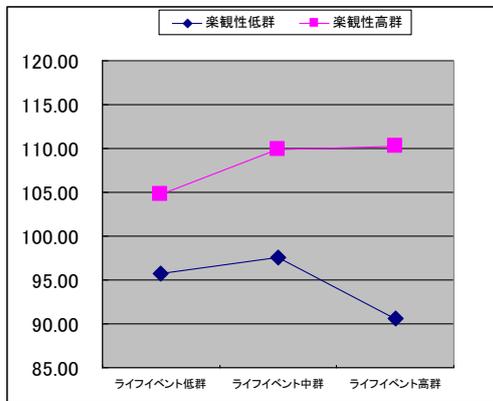


Fig 40 楽観性得点群・家庭ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

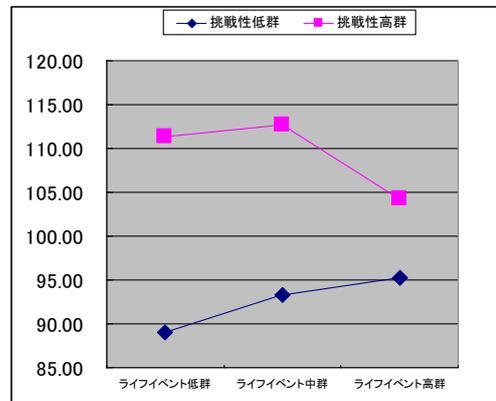


Fig 41 挑戦性得点群・家庭ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

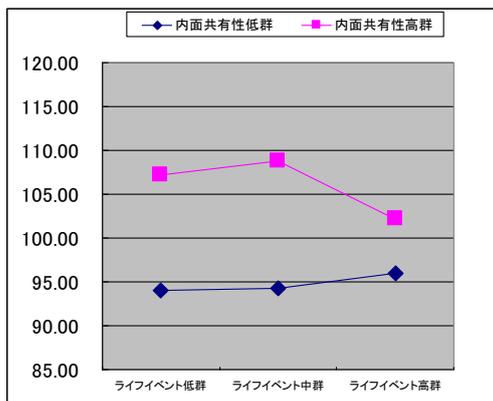


Fig 42 内面共有性得点群・家庭ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

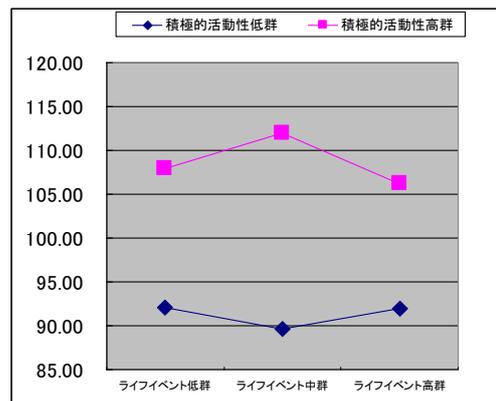


Fig 43 積極的活動性得点群・家庭ライフイベント得点群条件にみた学校適応感尺度の平均値

Table 12 自尊感情尺度に関する2要因分散分析の分析結果及び平均，標準偏差

レジリエンス低群			レジリエンス高群			SS	df	MS	検定
ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	レジリエンス			
n	38	29	25	21	44	7590.06	1	7590.06	F=40.7853, p<.001
平均	73.11	73.34	70.96	91.71	85.45	ライフイベント	874.49	2	437.24 F=2.35
SD	15.47	13.18	11.38	13.55	14.04	交互作用	458.98	2	229.49 F=1.23
						残差	31451.90	169	186.11
						合計	40676.31	174	
楽観性低群			楽観性高群						
ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	楽観性	2855.48	1	2855.48 F=13.1463, p<.001
n	32	32	23	27	41	ライフイベント	597.61	2	298.81 F=1.38
平均	76.34	75.09	71.91	83.74	84.98	交互作用	60.10	2	30.05 F=0.14
SD	17.51	14.23	11.47	16.30	14.02	残差	36730.87	169	217.34
						合計	40676.31	174	
挑戦性低群			挑戦性高群						
ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	挑戦性	5825.32	1	5825.32 F=30.22, p<.001
n	31	31	22	28	42	ライフイベント	602.87	2	301.43 F=1.56
平均	72.52	72.58	72.36	87.71	86.60	交互作用	554.29	2	277.15 F=1.44
SD	16.15	12.10	11.93	14.89	13.97	残差	32576.50	169	192.76
						合計	40676.31	174	
内面共有性低群			内面共有性高群						
ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	内面共有性	96.72	1	96.72 F=0.41
n	34	23	17	25	50	ライフイベント	846.84	2	423.42 F=1.81
平均	77.71	81.61	74.65	82.48	80.20	交互作用	287.94	2	143.97 F=0.62
SD	15.56	12.85	12.11	19.26	15.80	残差	39532.66	169	233.92
						合計	40676.31	174	
積極的活動性低群			積極的活動性高群						
ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	ライフイベント低群	ライフイベント中群	ライフイベント高群	積極的活動性	4461.59	1	4461.59 F=21.36, p<.001
n	28	27	20	31	46	ライフイベント	597.79	2	298.90 F=1.43
平均	75.29	73.78	69.05	83.74	84.67	交互作用	86.71	2	43.35 F=0.21
SD	16.95	12.29	11.67	16.73	14.87	残差	35300.33	169	208.88
						合計	40676.31	174	

次に自尊感情尺度を従属変数とした際の分散分析結果を Table 12 に示す。その結果、いずれの得点もレジリエンスとその下位因子の主効果が有意であり、ライフイベントの主効果及び交互作用は有意ではなかった。レジリエンスと下位因子 5 群・ライフイベント得点群条件にみた自尊感情の得点を図示したものが Figs.44~48 である。

相関分析では自尊感情はレジリエンスと有意な正の相関が認められたものの、このようにライフイベントの高低による自尊感情の落ち込み方をレジリエンスとの関連から分析すると、自尊感情の落ち込みはレジリエンスの強さと関連があるとは言い難く、小塩ら（2002）とは異なる結果が示された。小学生の場合は、レジリエンスは自尊感情とはまた別の精神的な健康の側面に、効果を及ぼしているという可能性が示唆された。

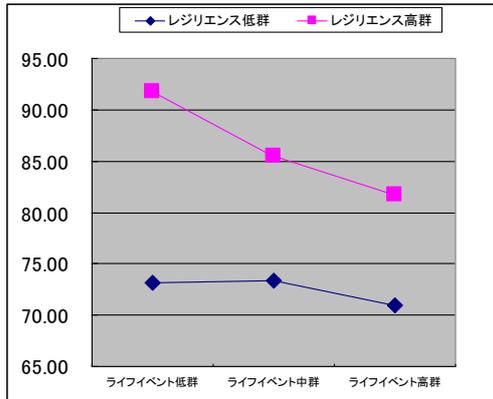


Fig 44 レジリエンス得点群・ライフイベント得点群条件にみた自尊感情尺度の平均値

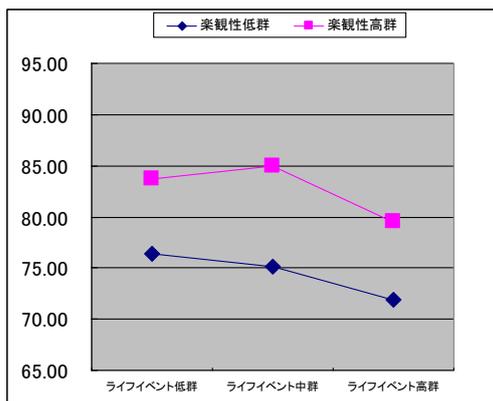


Fig 45 楽観性得点群・ライフイベント得点群条件にみた自尊感情尺度の平均値

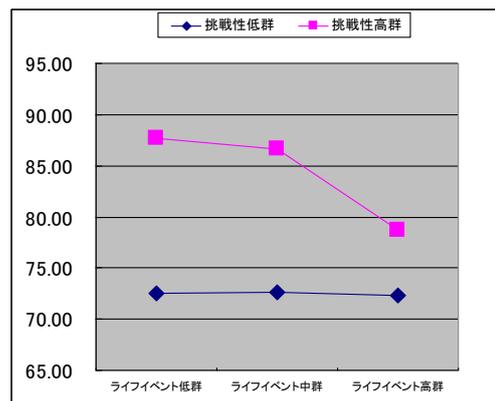


Fig 46 挑戦性得点群・ライフイベント得点群条件にみた自尊感情尺度の平均値

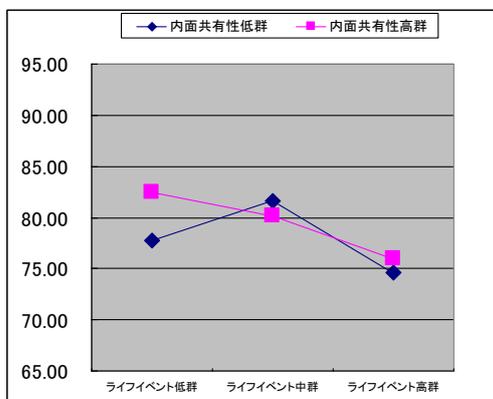


Fig 47 内面共有性得点群・ライフイベント得点群条件にみた自尊感情尺度の平均値

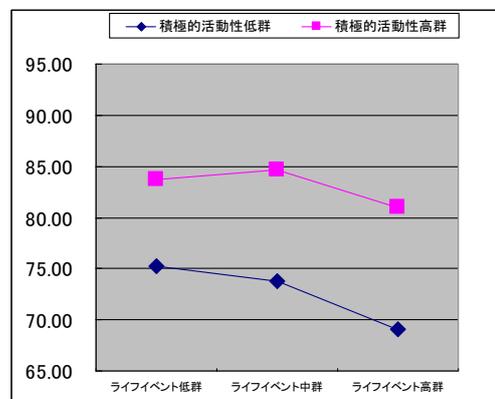


Fig 48 積極的活動性得点群・ライフイベント得点群条件にみた自尊感情尺度の平均値

本調査 2

1 目的

教師評定用レジリエンス尺度との関連による尺度の妥当性の検証。

2 方法

- (1) 項目の準備：高辻(2002)による幼児期の園生活における保護者評定用レジリエンス尺度を、小学生の学校生活場面に適合するように項目内容を修正・追加した教師評定用レジリエンス尺度 23 項目を準備した。
- (2) 調査時期：2012 年 1 月
- (3) 調査対象：青森県内の公立小学校 4～6 年生学年各 20 名の合計 60 名(男子 25 名，女子 45 名)。回答者はそれぞれの学級担任。
- (4) 手続き：本調査 1 で行ったレジリエンス尺度の総得点から各学級の上位・下位各 5 名を算出し，それらの児童を対象に普段の学校生活の中で見られている児童の認知面行動面の傾向について検討するために，質問紙調査を実施した。所要時間は 30 分程度。
- (5) 質問紙の内容：教師評定用レジリエンス尺度 23 項目の回答方法は「とてもそう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の 5 段階評定を用いる。

3 結果

- (1) 因子構造：まず，各項目の平均値と SD をもとに検討したが天井効果・フロア効果が疑われる項目はなかった。そこで尺度全体の因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。因子負荷量が小さい項目（おおよそ.40 以下）や複数の因子に同程度の負荷量を示す項目を除外した。因子構造についての分析では，高辻(2002)と同様に「社会的スキルの柔軟な利用」「ストレス耐性」と解釈できる 2 つの因子を見出すことができた。
- (2) 教師評定用レジリエンス尺度との関連による尺度の妥当性：レジリエンス自己評定高群とレジリエンス自己評定低群について，教師評定によるレジリエンス尺度得点を算出し，平均値の差の検定を行った(Table 13)。検定の結果，有意水準 0.1%で有意差が見られた。自己評価でのレジリエンス高群は低群に比べて，教師評定によるレジリエンス得点が高かった。

Table 13 自己評価によるレジリエンス高群と低群の教評定レジリエンス得点の平均値

層	N	平均値	標準偏差	F 値	t 値(df)
レジ低群	30	59.70	12.177	0.028	4.447 ***
レジ高群	30	73.57	11.976		(58)

*** $p < .001$

考察

尺度の構成と信頼性・妥当性の検討 本研究の目的はレジリエンスの状態にある者の心理特性を反映する小学生版のレジリエンス尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することであった。石毛・無藤(2006)や高辻(2002)による先行研究と予備調査をもとに尺度を作成し因子分析を行った。その結果、「楽観性」「挑戦性」「内面共有性」「積極的活動性」という4因子を見出すことができた。石毛・無藤(2006)における中学生用尺度の下位因子と比較すると、「内面共有性」「楽観性」に関しては同様の結果であったが、中学生で「意欲的活動性」と解釈された因子が小学生の場合だと「挑戦性」「積極的活動性」と独立しているものであることが確認された。「挑戦性」「積極的活動性」のどちらの項目も個人の活発な行動を支えるような認知の傾向をとらえる項目である。「挑戦性」は「失敗してもあきらめずに、もう一度挑戦する」や「やり始めたことは最後までやり通す」という項目が示すように、課題を遂行する際に困難があっても取り組みを途中で投げ出さないようにしようとしているという個人の構えの傾向の強さを測定している因子であると思われる。対して「積極的活動性」は「新しい友達や先生に積極的に話しかけることができる」「新しい行事や仕事にすぐなれる方だ」という項目が示すように、課題に向かっていく際に抵抗なく行動を始めることができるというこれまでの自分自身の行動の傾向を、個人がどう評価しているか測定している因子であると思われる。挑戦性は失敗や困難を想定しているが積極的活動性は失敗や困難の想定はない。失敗や困難の想定なしに物事に取り組むことができる傾向は生活経験の少ない小学生であるからこそ見出せる特質ではないかと考えられる。小学生におけるレジリエンスの構造面の特徴が本研究で明らかになったと言える。また α 係数の分析結果からは、内部一貫性があると判断される程度の数値が得られた。

相関関係の分析では、レジリエンス尺度の得点は自尊感情尺度や学校適応感尺度と正の相関を示した。このことからレジリエンス尺度の得点は適応の指標として妥当であると考えることができる。自尊感情はライフイベントと有意な負の相関関係にあった。その一方でレジリエンス尺度の各得点はライフイベントとは有意な相関を示さなかった。自尊感情は過去のつらいライフイベントの経験に影響を受けるが、レジリエンス及びその下位因子はライフイベントから独立した要因であるということが示唆された。

分散分析の結果から、小学生のレジリエンスの機能的な特徴を読み取ってみる。レジリエンスと各下位因子は学校適応感と自尊感情をライフイベントの多少に関わらず底上げしているものと見ることができる。レジリエンスの低い者に比べて高い者は自尊感情が高く、学校生活に対して適応できているとい主観的な感覚をより高く有しているものと思われる。中でもレジリエンス下位因子の楽観性は、ライフイベント経験数が中から高になる段階で学校適応感の落ち込みを防ぐ心理的機能を有しているように見られる。分散分析の結果からは、ネガティブなライフイベントの経験が多くなっ

た時に、楽観性の低い者に比べて高い者は学校適応感の「将来」因子の得点が有意に高かった。つまり小学生の場合、つらい出来事を多く経験していたとしても目の前の問題に対処する際の楽観的な認知や行動の傾向が、自らの将来に対して明るい展望を持ち、真剣に未来を考える態度と強く関連があるという可能性が示唆された。

教師評定のレジリエンス尺度得点の平均値の比較による分析では、自己評定レジリエンス得点高群は低群に比べると、教師評定による尺度の得点も有意に高い結果を示した。評価者と評価尺度を変えても同様の結果が得られることが示されており、収束的妥当性がある程度認められる結果となった。

小塩ら(2002)による大学生を対象とした調査では、自尊感情においてレジリエンスおよび下位因子とライフイベントの有意または有意傾向を示す相互作用を見出している。しかし本研究では、精神的な健康を表す指標として採用した学校適応感と自尊感情のほとんどの側面に対して、レジリエンスの強さやライフイベントの頻度との関連において明確な関係を見出すことができず、レジリエンス尺度の妥当性の検討としては十分であるとは言えなかった。この小塩ら(2002)の調査との相違点としては調査対象が異なることが挙げられる。小学生に対するレジリエンスの効果を検証する際にどのような精神的健康の指標を用いるべきかといった、妥当性の検証法についても課題が残る。今後尺度項目の改善と共に妥当性検討の方法についてもさらに改善される必要がある。

今後の課題 レジリエンス高群はライフイベントが増えても精神的な健康を高く維持し、それに対してレジリエンス低群はライフイベントの増加に伴って精神的な健康の指標を低下させていくような現象が、本研究において見出せるものと想定していた。しかし従属変数を学校生活適応感やその下位因子、自尊感情に変えてみたり、ライフイベントの条件やレジリエンスの条件をその下位因子などに変えてみたりすると、ライフイベントの増加に伴いレジリエンス高群も低群も精神的健康の指標が共に減少していく傾向を示したり、レジリエンス高群と低群の精神的健康の指標がライフイベントの増加に伴い収束していく傾向を示したりする場合はほとんどであった。小学生のレジリエンス研究はまだ始まったばかりで、その概念が小学生に対してどう機能するのかといった点についても、今明らかにされている途中の段階である。本研究で採用した自尊感情や学校生活適応感では、レジリエンスが高くてもライフイベントの増加に伴う落ち込みを防ぐ現象は見出すことはできなかった。今後の研究ではレジリエンスが小学生のどこに有効に働く機能を有しているのか特定するために、精神的な健康の指標となるものをさらに拡大させて、広範囲でデータを収集する必要がある。また、想定していた現象が見られなかったのは個人内でのデータの変動を研究の対象にできなかった点にも起因するのではないかと考えられる。本研究では倫理面の問題を解決できずに個人間データのからレジリエンス機能の分析を試みた。個人間であれば全く違う人間同士のデータの差をもって、個人の変動と見なすしかないと言った点で、研究方法の限界があったのではないか

という考えは捨てきれない。ゲーム的、または作業的な課題を与えた上でその前後のデータの比較を試みるなど、倫理的に配慮された場面設定で、レジリエンスの機能を検討するといった、方法面でのさらなる改善と工夫が、今後の研究において望まれる。

本研究では、小学生のレジリエンスはストレスフルなライフイベントが多くなった際に、学校生活適応感の一部に効果が表れることが示唆された。レジリエンスの概念が学校教育に適用できる可能性がここに伺える。未来にはどんなつらい出来事が待ち構えているか予想はできず、想定外の出来事が実際に起こり得るということを私たちは震災から学んだ。レジリエンスが育成可能なものであるならば、そしてその力を人生の早い段階で学校教育において伸ばせるものであるならば、未来の危機に対処する能力であるレジリエンスはきっと、将来つらい出来事により打ちひしがれそうになるであろう一人の児童を救い、さらにその後の生活においてもダメージに負けない、回復力のある心を持ち続けさせてくれるのではないかと筆者は考える。レジリエンスの学校教育への適用を考える際、本研究で明らかになった「楽観性」と「将来への展望」の関連を、どのように健康教育プログラムの開発や学校現場での予防的介入に反映させるか、今後検討が必要であると言えよう。

引用文献

- 傳田健三 2008 小中学生にうつ病はどれくらい存在するのか 児童心理 62(9),Pp12-22. 金子書房
- E.H.エリクソン 小此木啓吾(訳) 1973 自我同一性 - アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- 古荘純一 2010 子どものうつに学校と医療がどう関わっていけばよいか 教育と医学 58(8), 748-755.
- 石毛みどり・無藤隆 2005 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャルサポートとの関連 - 受験期の学業場面に着目して - 教育心理学研究,53, 356-367.
- 石毛みどり・無藤隆 2006 中学生のレジリエンスとパーソナリティの関連 パーソナリティ研究,14(3), 266-280.
- 加藤敏 2009 現代精神医学におけるレジリアンスの概念の意義 加藤敏・八木剛平(編) レジリアンス現代精神医学の新しいパラダイム 金原出版株式会社 Pp.1-24.
- Kobasa,S.C. 1979 Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37,1-11.
- 松本陽子・山崎由可里 2007 小学生におけるADHD傾向と自尊感情 和歌山大学教育学部紀要. 教育科学,57, 43-52.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析 教育心理学研究,39,182-185.

- 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 1987 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-145.
- 中谷素之・小塩真司・金子一史・長峰伸治 2002 レジリエンスと性格特性—精神的回復力と Big Five との関連— 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 33.
- 中谷素之・小塩真司・金子一史・中山留美子 2007 児童の精神的回復力および自己愛が学校適応に及ぼす影響 - 短期縦断的データによる検討 - 日本心理学会第 71 回大会発表論文集, 1183.
- Nakazawa, J. 1997 Children' s life event and stress: social support, social problem solving as a buffer of children' s stress responses. *Bulletin of the Faculty of Education, Chiba Univ.* 46,1,167-172.
- 仁平義明 2009 人間力育成のパラダイム・シフト--ハーディネス(心の頑強さ)からレジリエンシー(心の回復力)へ (心理臨床フロンティア--倫理の再構築に向けて) -- (人間力の育成を目指す心理教育) 現代のエスプリ 500, Pp.194-205. 至文堂
- 小原敏郎・武藤安子 2005 「保育の質」と「レジリエンス」概念との関連 日本家政学会誌, 56(9), 643-651.
- 岡安孝弘 1999 コーピング 中島義明・子安 増生・繁榊算男・箱田裕司・安藤清志・坂野雄二・立花政夫(編) 心理学辞典 USB 版 有斐閣
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 - 精神的回復力尺度の作成 - カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 下川朋子・室田洋子 2009 児童期における精神的回復力と家族コミュニケーションおよびソーシャルサポートとの関連 児童学研究: 聖徳大学児童学研究紀要, 11, 59-66.
- 高辻千恵 2002 幼児の園生活におけるレジリエンス - 尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討 - 教育心理学研究, 50, 427-435.